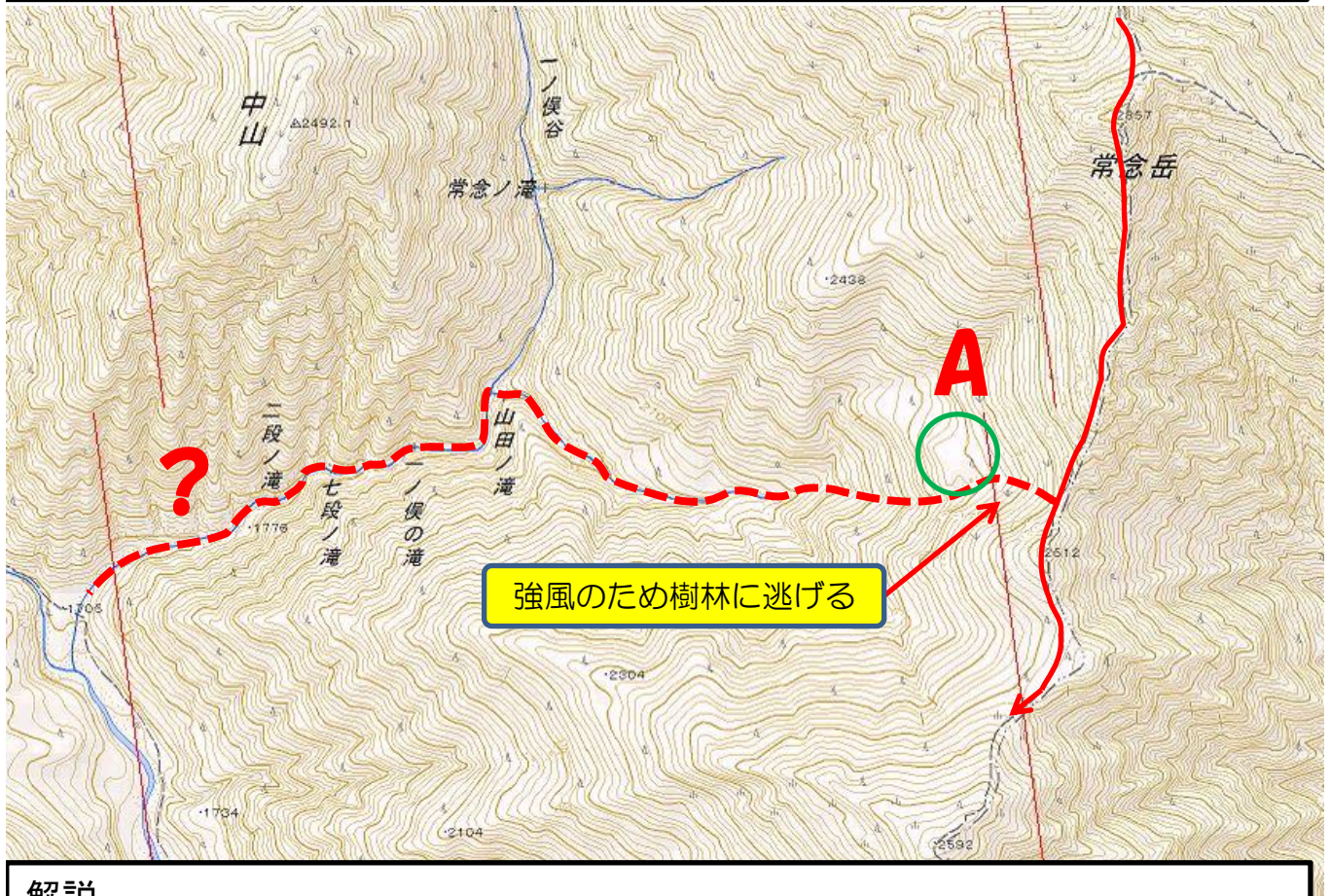


## 常念岳遭難(2001年1月)

常念岳を越えたコルで、突然風が荒れ狂いだした。西側の樹林帯へ風を避けるため下降。樹林帯では、トレースは無く、視界もきかず、方向を見失った。「何とかしなければ・・・。」と思い、厳冬の一ノ俣谷を下る決意をする。手は凍傷になり、滝は水のある滝壺に飛び降りた。3日間一ノ俣谷を下降し続け、なんとか横尾山荘に辿り着き、救助を求めた。



## 解説

中房温泉(30日)～燕岳～大天井岳(31日)～横通岳～常念岳(1日)～蝶ヶ岳の計画。大天井岳からの稜線で強風のため軽い凍傷になった。1月2日も強風は続き、視界も悪い。常念岳を下り、2,512mピークを登ったところで、突然、風が荒れ狂い出した。今まで経験のない強風に、樹林の中へ逃げた。冷静さを失っているため、常念小屋へは戻れない。負のスパイラルへ落ちてゆく。

樹林で地図を広げたが、現在位置が分からない。「このままでは、死んでしまう。」恐怖が襲う。とにかく下ることを決意するが、凍傷が更に悪化する。1月3日、天候が悪く、更に沢を下る。雪崩の危険を考える余裕も無くなった。1月4日も吹雪。なりふり構わず下降をするが、滝が現われ万事休す。滝壺にお尻から浸かり、とうとう足まで濡らしてしまった。その夜は、あまり寝れなかった。1月5日、指先もひどい凍傷で指は諦める覚悟をした。この日も横尾山荘にはたどり着けない。濡れた服も十分乾かないまま、凍りついたシュラフに潜り込む。1月6日、横尾山荘が見えてから足が前に進まない。やっとのことで山荘に到着し、助けを待った。

冬期、稜線の突風は経験しないと厳しさが分らない。視界も悪く、稜線から逃げたい気持ちはよく分る。Aの平らに注目し、テントを張りたいところだが、気象条件が悪いので、なんとも言えない。しかし、ひとつ言えることは、道に迷うときには、冷静さが失われているのだ。冷静な判断が負のスパイラルに落ちない唯一の方法である。沢を下ったことで、脱出まで6日間費やしてしまった。雪崩の危険もあった。「雪山は尾根を下る。」基本を忘れた時に遭難は起きるのだ。